

(共依存し続ける) 自由からの逃走？

——小西真理子『共依存の倫理』へのコメント

奥田太郎
(南山大学)

共依存とはいったい何なのか。共依存という言葉や概念はどのようなプロセスを経て成立・展開し、そしてどのように語られてきたのか。小西真理子『共依存の倫理』（晃洋書房、2017年）は、これらの問いに対して誠実かつ綿密に応答した労作である。「アダルトチルドレン」や「トラウマ」、「アルコール」などの隣接概念との関係についても明晰に述べられており、共依存を取り巻く多様な文脈の所在が明らかにされている。とはいえ、本書のタイトルは「共依存とは何か」ではなく、他ならぬ「共依存の倫理」である。そこで問われるのは、共依存はどのように語られるべきか、ということであり、あるいは、共依存し続けることは許されるか（換言すれば、共依存者に共依存し続ける自由はあるか）、ということでもあろう。実は、こうした倫理的な問いに対して本書では、終章を中心に随所で示唆的な記述が見られるものの、正面から応答している箇所はほぼ見当たらないように思われる。もしかすると、そうした明言を避ける書き振りこそが、「共依存の倫理」に取り組むうえで不可欠のスタイルなのかもしれない。本稿では、「共依存の倫理」にまつわると私が考える幾つかの問いを著者の小西自身に向けて投げかけてみたい。

1) 共依存と幸福について

小西は、本書全体を通じて、共依存に関する自身のスタンスを折に触れ繰り返し提示している。小西は、共依存を回復すべき逸脱状態として位置づける「回復論」に病理化イデオロギーの匂いを嗅ぎつけ、その限界に注意を促す。そのうえで小西は、「今後は、客観的に見て完全に否定的な関係性における肯定的側面を示すことによって、共依存者をはじめとする「病理的な」関係性にとどまり続けることを望む者たちの生き方が楽になるような議論を諸言説に加えること、そして、そのための具体的な方法を考えていきたい」（小西 2017、279 頁）と今後の課題に言及し、「「病理的な」関係性にとどまり続けることを望む者たちの「介入されない権利／治療しない自由」（小西 2017、279 頁）を検討の俎上に乗せることを

宣言している。小西のこうした倫理的な主張を支えているのは、「生死を賭けてまで共に依存し合うことを選ぶ」とする人びとに対して、その善悪を一概に呈示することもできないのではないかという疑問」（小西 2017、76 頁）であり、また、「誰かの人生（死）を本質的な意味で、他者が評価することはできるのだろうか」（小西 2017、275 頁）という問いである。小西のこうした基本的な問いは、倫理的な相対主義の議論に含まれるようにも見えるが、共依存がテーマとなっていることを考慮すると、むしろ、個々人の幸福や不幸をどのように考えるべきか、という倫理的な幸福論の延長線上にあると考えるのがふさわしいように思われる。言い換えれば、小西は、共依存者のなかに、回復を望まない幸福な共依存者と、回復を求める不幸な共依存者がありうると考えているように見受けられる、ということである。

仮にこの見立てが正しいとして、ここでは、倫理的な幸福論においてデレク・パーフィットが提示した有名な枠組みを援用して問いを深めたい。パーフィットは『理由と人格』補論 I「ある者の生を最もうまく行かせるもの（What Makes Someone's Life Go Best）」において、「可能な限りで、ある者にとって最善のもの、あるいは最もこの人物の利益になるもの、あるいはこの人物にとってその生を最もうまく行かせるものは何か」という問いに対して、その解答として三種類の「自己利益に関する理論」が存在する、と述べる（パーフィット 1998、667 頁）。実は、パーフィット自身はこの議論を幸福に関するものと明確に定義づけているわけではないのだが、「特定人物の生がうまく行くこと」を問題にしているため、実質的には幸福論の重要な分析枠組みを提示していると考えてもさしあたりはよからう。さて、パーフィットが提示する三つの理論は、以下の通りである。

快樂説：ある者にとっての幸福とは、その当人が快樂を得られていることである。

欲求充足説：ある者にとっての幸福とは、当人が欲

求したことが充足されていることである。

ことが見込まれるが、Aさんは、恋人と分かれて人生をやり直したいと強く欲求している。

客観的リスト説：ある者にとっての幸福とは、本人の意図や欲求にかかわらず、人として望ましくないものを避け、望ましいものを実現していることである。

要点を掻い摘んで示せば、快楽説では、当の人物自身の主観的な快適さがその人物の幸福の主たる構成要素となっているのに対して、客観的リスト説では、当の人物自身の主観とは独立に、その人物の幸福を構成する要素は客観的に定まっているとされる。言わば、快楽説に基づけば、自分が幸福か否かは本人が決めることであるのに対し、客観的リスト説に基づけば、自分が幸福か否かは本人だけでは決められず、時に本人以外の第三者が決めるものだということになる。この中間に位置するのが欲求充足説であり、この説では、幸福の内容を決める欲求は本人のものであるが、その欲求が充足されるか否かは本人の思惑とは独立に客観的な事実として決まるため、その人物が幸福か否かは客観的に定まることになる。欲求充足説に基づけば、欲求は原理上、本人の自覚や生存を前提とせずに充足されうるため、本人の幸福が本人の死後確定するという場合も十分ありうるのである。

これら三つの理論は、私たちの考える幸福の重要な側面をごく大雑把にはあるがうまく捉えたものであるように思われる。では、共依存者の幸福について考える際に、この分析枠組みはどのように使えるだろうか。あるいは、小西が用いるとすれば、どの理論になるだろうか。

もう少し踏みこむなら、パーフィットは、欲求充足説をさらに加算的欲求説と全体的欲求説に分けてそれぞれの妥当性を論じている（パーフィット 1998, 672-675 頁）。加算的欲求説とは、充足が目指される欲求はある人の人生において部分的なもので、それを加算することでその人の幸福が決まる、とする理論的立場である。これに対して、全体的欲求説とは、充足が目指される欲求はある人の人生全体に関わるもので、全体的に何を欲求するかでその人の幸福が決まる、とする理論的立場である。共依存というテーマに近づけて仮想事例を立てるなら次のようになるだろう。

事例 A：恋人と共依存の関係にある Aさんは、どうしても恋人と別れられないが、恋人と一緒にいることでその都度の自分の欲求は充足される。このままでは、そうした生活が一生続いていく

この事例を加算的欲求説から捉えれば、人生をやり直したいという一つの欲求を充足しない代わりに、その都度の自分の欲求を何度も充足することができるので、この人は幸福であり、その点で、共依存関係を続けることはこの人にとってよいことだと考えられる。これに対して、全体的欲求説から捉えた場合には、恋人と分かれて共依存関係を解消したいと欲求している（全体的な欲求をもっている）なら、その都度の部分的欲求の充足よりも、全体的な欲求の充足をした方が幸福であり、その点で、共依存関係を断ち切ることがこの人にとってよいことだと考えられる。

小西が『共依存の倫理』のなかで論じようとして展開しきれなかったように思われる倫理的な議論は、こうしたアプローチからも深めていけるのではないだろうか。あるいは、共依存関係や共依存者について「幸福／不幸」の枠組みを用いることがそもそも適切だということになるのだろうか。共依存と幸福という点について、小西の見解を伺ってみたい。

2) 共依存と「あるべき人間関係」論について

小西は、本書のなかで、共依存を異常視する現在の社会のあり方に無自覚に迎合することに対して、ある種の異議申し立てを行なっている。とりわけ小西が警戒を促すのは、共依存の回復プログラムを支える「回復論」そのものに含まれる問題性である。回復プログラムの実践に成功すれば、共依存者にも「健全な結婚生活」を送ることが可能になるが、それを維持するためには回復プログラムを継続しなければならない。小西によれば、こうした回復プログラムの実践は、「実質、半永久的に続き、それは健全な家族を築くべきという要請によって統制され続けることを意味している。」（小西 2017, 195 頁）小西曰く、それは「回復プログラムを通じた統治」（ibid.）に他ならない。この「統治」を堅牢なものにしているのは、「依存症者」の認定が徹頭徹尾他者によってなされるという、共依存の有する「否認の病」という特性である。

要するに、共依存者は一般に、自分自身が共依存関係に陥っていることを認めようとしない（否認しようとする）が、まさにそれこそが共依存という病の特徴なのだ、と考えられているわけである。したがって、共依存者に対して、回復プログラムを推奨する他者は、「あなた自身が認めなければ始まらない」と本人に決断を迫るにもか

かわらず、本当に当人が認めたのかどうかの判定は不確かな当人の観点ではなく確かな他者の観点から行われるのが適切だ、と考えられることになる。換言すれば、「病理を認めること」においては、「自己」の判断が尊重され、「病理の否認」においては、「他者」の判断が優先されている。」(小西 2017、247-248 頁) そこでは、共依存者に対して、「自分は病でありそこから回復しなければならない」という病の認識と回復願望とが強固な規範として構造的に要請される。さらに、回復プログラムを受け続けることで共依存から離脱することに成功した元共依存者は、自身の共依存の経験を語り続けることによってむしろ「共依存者としての自分」というアイデンティティを保ち、かつ、それに癒されるというある種の嗜癖に陥ることで、回復論にまつわる規範をより強固なものにするのである(小西 2017、227 頁; 249-250 頁)。

こうした回復プログラムを通じた統治とそこに潜む強固な規範の要請から見えてくるのは、今となっては共依存言説によって病理化されているのが「理想とされる個人のあり方や関係性の枠組みから外れたもの」に他ならず、自律主義や個人主義などの「健全な生き方/関係性に関する道徳論」がこうした病理化を促してきた、ということである(小西 2017、253 頁)。「共依存言説には、あるべき姿とあるべき関係性を指し示す倫理観が内在している」(小西 2017、278 頁) のであり、小西は、そうした倫理観に対して懐疑的な、もう少しはっきりと言うなら、批判的な姿勢をとって、なるべく距離を置こうとしている。

しかし、他方で小西は本書で、現在支配的な見方とは異なる別の「あるべき人間関係」像を明確に提示しているわけではない。むしろ小西は次のように結論づける。「本書における結論は、共依存と呼ばれ得る現象が様々な観点において両義的であり、そのような現象に対して、完全に肯定することも否定することもできないということである。さらに主張するなら、その判断に普遍的な結論を与えることこそ倫理的でないと考える。」(小西 2017、279 頁) こう結論づけた小西が提示するのは、「個人の声を重視した文脈依存的な判断」であり、そうした判断に基づく「共依存の問題における分離とは異なる解決策」(小西 2017、280 頁) の模索である。

確かに、「あるべき人間関係」を何らかの仕方で普遍的に規定することは、小西氏自身が批判的に距離を置いている現在の共依存言説と同じ轍を踏むことになるため、安易に行なうことは差し控えるべきであろう。しかし、「関係性から生じる病理の考察を通じて見えてくるもの」

(小西 2017、132 頁) とは、上記のような文脈主義的あるいは個別主義的な着地点のみで十分だと言えるだろうか。たとえば、「あるべき人間関係」を提示するのではなく、「あるべき人間関係」を論ずるとはいかなることか」というメタレベルの視点に立って、共依存の考察から「人間関係」とはそもそもいかなるものか」という哲学的な洞察へと至る思考のルートを示すことは、小西の批判的スタンスの同一線上で可能であり、「共依存の倫理」を構想するならば、是非ともそうすべきだったのではないだろうか。「あるべき人間関係」論から距離を置くことの先に小西が何をしようとしているのか、本書の終章で予兆的に示されていることよりもより踏み込んだ見通しをお聞きしたい。

また、人間関係から少し焦点を外して、共依存し続ける自由について正面から論ずることもできるだろう。小西は類似の自由の問題として、「酔っ払って死ぬ自由」や「治療しない自由」(小西 2017、263 頁) を挙げるが、これらが典型的な愚行権の問題であるのに対し、「共依存し続ける自由」は、愚行権の行使には尽きない、他者への危害との関係を直接的に含んでいるように思われる。小西は、「共依存関係を築いた者同士が互いに依存し合うことで癒され、死にたいほどの苦しい状況を緩和できているのなら、共依存関係は、共依存者の耐えがたい精神的苦痛を治療しているのではないだろうか」(小西 2017、140 頁) と述べている。共依存関係にある互いの精神的苦痛の除去を人間関係上重要な価値として認めるのなら、共依存を継続するか否かは、当人の自由(してもしなくてもよいこと)というよりむしろ、継続するように促す責任が周囲の人間に発生すること(した方がよい、あるいは、しなければならないこと)になろう。となれば、共依存し続けることは、周囲の人々にそれを支える応答を要求する一種の道徳的権利とみなされるべきものでもありうるし、場合によっては、道徳的な義務の一つということにもなりうる。このように、共依存し続ける自由について考えるならば、「あるべき人間関係」についてまともを考えることを避けて通れないことになろう。

また、私たちは共依存し続ける自由には耐えられるのか、という問題もあるだろう。回復論のトラックに乗るといふ安定性や安心感と引き換えに、共依存を継続する自由へと放り出されることは、孤独と不安に満ちた寄り添えない状態に身を置くことになるかもしれない。エーリッヒ・フロムを持ち出すまでもなく、自由の寄り添なさに耐えられない多くの人びとは、共依存し続ける自由であったとしてもそれが自由である限り、そこから逃走してしま

うのではないだろうか。そうだとすれば、共依存を継続する自由を抑圧しているのは、社会の構造や倫理観そのものというよりむしろ、そこから生じてくる自由から逃走してしまう人びとの権威主義的な性格(ある意味の「弱さ」)だということになる。共依存し続ける自由を小西が説くとき、目配りすべきポイントは多数あるように思われるが、小西はそれらをどのように捉え、論じようとしているのだろうか。

3) 共依存と〈弱いロボット〉について

工学者の岡田美智男は、ロボット研究において〈〇〇してくれるロボット〉＝〈強いロボット〉から脱却して、周囲の人びとの手助けを上手に引き出して目的を達成するような〈弱いロボット〉の開発を試みている。岡田は次のように述べる。

例えば、「勝手にゴミを拾い集めるロボット」もいいけれど、むしろ「ちょっと手のかかるくらいのロボット」はどうか…。ゴミを拾おうとしても、上手に拾えない。それを見かねた子どもたちが駆けよってきて、そのゴミを拾ってあげるような…。そうしたことを考えるなかで、いまでは〈ゴミ箱ロボット〉と呼ばれる、ちょっと他力本願なロボットのコンセプトが生まれてきた。「自分ではゴミを拾えないのだけれど、周りの子どもたちの手助けを上手に引き出しながら、結果としてゴミを拾い集めてしまうようなロボット」である。(岡田 2017、186-187 頁)

岡田の課題は、「〈〇〇してくれるロボット〉という枠組みから、どうしたら抜けだせるのか」(岡田 2017、183 頁)であり、「わたしたちの手助けを思わず引きだしてしまうような場」(岡田 2017、194 頁)の生成の仕組みを工学的に解き明かそうとしている。それはいわば、バランスのよい依存関係を生み出すロボットの開発と言ってよいだろう。岡田は、「ひとりでできるもん！」を目指すものづくりの流れから、〈持ちつ持たれつの関係〉から離れすぎないようなものづくりの流れを求めている(岡田 2017、205 頁)。ここで、「ひとりでできるもん！」＝自律、〈持ちつ持たれつの関係〉＝共依存というように見立てられるとすると、小西が本書を通じて提言している(ように思える)「共依存し続ける自由」の構想は、岡田がロボット業界で試みている〈弱いロボット〉の開発に通ずるものがあるように思われる。

岡田の洞察は、ロボット開発を通して人間理解にまで

及ぶ。

なにげなく歩く、なにげなく話す。自らの内なる視点から発話や行為を繰り返す際に、その意味や役割を完結できない。そうした〈不完結さ〉や〈弱さ〉を内包した身体は、ドキドキしつつも、他に委ねつつ、一緒に行為を生みだしていくという方略を選びとっていた。それを一方で支えている〈他者〉もまた然りである。／他者を予定しつつも、同時に予定される。人と人は、孤立した個体同士が対峙しあうだけではなく、むしろ同一の身体的基盤を有する〈オープンなシステム〉同士が相互に支えつつ、支えられるようなカップリングを作り上げている。(…)／では、人とロボットのあいだでそうしたカップリングを生みだせるものなのか。(岡田 2017、146-147 頁)

こうした洞察から共依存を今一度見直したとき、そこには、人間関係の核心に触れる光景が広がっているのかもしれない。共依存し続ける自由は、権利としてよりむしろ、事実として捉えられるべき事柄である可能性もある。小西は果たして、共依存の倫理学的研究を通じて、人間関係に何をみいだすのだろうか。

文献

- 岡田美智男『〈弱いロボット〉の思考：わたし・身体・コミュニケーション』講談社現代新書、2017年。
- 小西真理子『共依存の倫理：必要とされることを渴望する人びと』晃洋書房、2017年。
- パーフィット、デレク(森村進訳)『理由と人格：非人格性の倫理へ』勁草書房、1998年。[Derek Parfit, *Reasons and Persons*, Oxford University Press, 1984.]